

芦屋大学臨床教育学部

教育ジャーナル

第4号

2023

芦屋大学 臨床教育学部

芦屋大学臨床教育学部

教育ジャーナル

第4号

2023

芦屋大学 臨床教育学部

目次

1. 学生による報告・記録

《教育実習・保育実習》

保育所実習を終えて	佐藤 愛海	2
保育実習を通して学んだこと	廣田 結菜	3
保育所実習で学んだこと	中西 千春	4
幼稚園教育実習を通して学んだ事	金木 夏輝	5
幼稚園教育実習を通して学んだ事	高橋 はな	6
施設実習を終えて	山本 愛代	7
小学校の教育実習を経験して	中村 有理花	8
特別支援学校教育実習を通して学んだこと	川内 梨央	9
教育実習を終えて	三浦 蓮一郎	11
教育実習で感じたこと	北井 万由実	12
教育実習で学んだこと	近藤 征哉	14

《インターンシップ》

学校インターンシップを経験して	荒川 奏	15
-----------------	------	----

《合格体験記》

公立保育教諭採用試験に合格して	池田 美咲	17
小学校教員採用試験に合格して	荒川 季奈	18
小学校教員採用試験に合格して	橋本 愛花	19
特別支援学校 合格までの道のり	福岡 歩美	20

2. 優秀卒業論文抄録

《教育学科》

スポーツ選手のモチベーションが下がったときの対処方法	山口 明莉	24
いじめの「傍観者」および「観衆」層に見る性格研究 —大学生を対象とした調査を中心に—	井村 恵美	28

《児童教育学科》

いじめの「傍観者」を「仲裁者」へ —「傍観者」にアプローチする KiVa プログラム—	橋本 夢花	31
---	-------	----

3. 2023 年度卒業論文タイトル一覧

4. 教員免許状・保育士資格取得者、採用状況

『芦屋大学臨床教育学部 教育ジャーナル』編集方針	48
--------------------------	----

執筆者紹介	50
-------	----

1. 学生による報告・記録

保育所実習を終えて

佐藤 愛海

保育実習を終えて、今まで学んできたことが全てではない事を学びました。今までの私は、保育士が「あれしなさい」「これはこうだから」という保育士が主体になってしまっているような保育をイメージしがちでした。子どもたちみんなが同時並行で、横並びになって一つの目標を成し遂げる、向かっていくという保育を想像していました。ですが、私が実習をさせていただいた園では、子どもたち主体で自由に保育が展開されている新しい保育のかたちをとられている園でした。それぞれが好きな遊びをし、それを追求できるように保育士の方がサポートしていました。壁に絵を描くのもよし、泥だらけになって遊ぶのもよし、与えられた物をどのように使うのもよしという園で、今まで私が見てきた世界とは全く違うもので感銘を受けました。「壁に絵を描いてはいけません」と育ってきた私にとっては考えられない事でした。ですが、壁に絵を描くのもドロドロになるのも大人が掃除するのが大変だったり、めんどくさいから禁止されてきたのではと実習先の先生がおっしゃられていて、すごく納得しました。壁に絵を描くのも泥だらけになるのも全て子どもにとっては“楽しい”や“不思議”を追求できるものであって全て今しか経験できないことであると思います。そこに大人の価値観を押しつけ辞めさせるのは、また違うのかなと考えさせれる瞬間でした。それが危険な遊びか危険じゃない遊びかが重要であって、危険じゃないなら好きにやらせるという自由な保育をされている実習園で、私もそんな保育をしたいと強く思いました。泥だらけになったり床や壁に自由に絵を描く子どもたちのワクワクした目や心から楽しんでいる表情は忘れられません。そして何より保育士の方が子どもたちと同じように、それ以上に楽し

く遊び、新たな遊びの発見をされていたのが子どもたちの笑顔を引き出している最大のポイントなのかなと感じました。私たち（保育士）がして楽しくない事は子どもも楽しくないと、あたりまえのことだけど、そのあたりまえに気づけていなかった私にとって、とても勉強になりました。一点しかみえていない私にとって、広く視野をもつ大切さに気づかされました。子どもたちに寄り添い、大人の価値観を子どもに押しつける保育ではなく、子どもが何に興味を持ち、何をしたいか、今やりたい事を全力でできるような、子どもを第一に考えた保育であれるようにしたいと思います。

(実習期間:2023年6月12日~22日)

保育実習を通して学んだこと

廣田 結菜

今回の実習で私が学んだことは「子どもは大人が思っている以上に様々なことを考えて行動している生き物である。」ということです。実習に行くまで、大学の講義で子どもの発達・子ども観についての話を聞き、学んできました。学んだとはいえ、実際に子どもとかかわっているわけではないので自分の想像する「子ども」を通して学んでいました。しかし、実習を通して実際にたくさんの子どものたちと関わり子どもの考えの幅がとても広いことに驚きました。

私は今回、1～5歳児すべてのクラスで実習をさせていただきました。子どもたちとの関わり方や保育者との関係の築き方への不安や緊張感はずっとありましたが、それを超える楽しみがありました。私の実習目標は「子どもを知ること」でした。実際にかかわることで見えてくる子どもの生態に興味を持ち、自らの学びに生かすことで「私の保育観」を形にしていきたいという意味で目標を立てました。

1歳児クラスから始まった私の実習は、初日から自分にただただ落胆することばかりでとてもナーバスになりました。子どもたちと一緒に遊んで関係を築いていきたいという気持ちと、子どもたちの「自分の遊び」のペースを壊してしまうのではないかとという気持ちが入り混じって自分が思うような行動がとることができず、保育者にも助言をいただきました。自分のできなさ加減にひたすら落胆しました。しかし、2歳児クラス担任の保育者に「最初はそんなもん。子どもたちはわかってくれている。子どもたちも同じ気持ち。」という言葉をいただきました。その時の私にはこの言葉がとても救いに感じました。子どもたちもはじめましての人が来て困惑しているし、一緒に遊びたいけど勇気が出ないという気持ち

を持っていることを教えて頂き、私が子どもたちに心を開かないことには何も始まらないと考えました。助言をいただいた後の実習はより子どもたちの目線になって子どもたちが考えていることを感じていることを受け止めようと接することを心掛けました。年齢が一つ上がるごとに子どもたちの見える景色も変わり、それに伴って子どもたち自身の考えや創造がより幅広いものへと変わっていくことを実感しました。子どもたちが私にくれる言葉一つ一つが実習の何よりの支えでした。

実習記録やエピソード記録を書くことは本当に大変でした。何度もくじけそうになりました。しかし、実習に集中して子どもたちとの関わりひとつひとつを大切にしていると次第に書くことが楽になりました。

2月に最後の実習があります。1回目の実習よりも幼稚園実習を挟んで確実に成長していると感じているので、有意義な実習になるよう目標を設定し、自分の保育の形を確立しようと思います。

(実習期間:2023年6月12日～22日)

保育所実習で学んだこと

中西 千春

初めての保育実習だったので、子どもとの関わりや保育者がどのように援助をしているか学ぼうと参加しました。実際現場で経験しないと分からない事ばかりでとても充実した 10 日間で、沢山の事を学べたと思います。私が実習をさせていただいた園は「子ども主体の保育」をする園です。子どもがしたい事をする。子どもの発想力で保育を創っていく。最初は観察していればわかる事と思っていました。しかし、実際はとても難しい事でした。観察しているだけではそれで終わってしまい、その後の保育に繋がらないという事を感じました。観察してからそれをなぜそうしたのかという子ども目線になって物事がどうして行われたのかという事を考えないとそれを活かした保育が繰り返されないと学びました。

実習にあって保育の概念が私の中で変わりました。目的やそれまでの過程を保育者が決めて、それを子どもがしていくのが普通だと思っていました。けれどそれは間違っていました。目的は保育者が決めてもそれまでの過程は子どもの行動を見て決める、という事が大事なのだと学びました。子どもがしたいことに制限を付けることなく、その後の片付けや準備を保育者が頑張る、という事も大事なのだと思いました。保育実習がもう一回あるので、その時にはより現場の保育者としての援助の仕方や子どもとの関わりをしていきたいと思っています。これまでに授業で学んだ事や他の現場で学んだことを活かしながら貴重な 10 日間でより充実したものにしていきたいと思っています。積極的に子どもと関わり、1 人で抱えたりするのではなく、周りの先生に頼りながら模擬保育をしていき、自分に得られるものは、全て得られるようにしていきたいと思っています。

(実習期間:2023 年 6 月 12 日～22 日)

幼稚園教育実習を通して学んだ事

金木 夏輝

幼稚園教育実習を終えて、私自身の未熟さ、子どもと関わることの難しさを改めて感じました。これまで受けてきた講義から沢山の学びや知識を得てきましたが、実際に実習に行くと、どうしたら良いのか分からなくなってしまうたり、保育者の方に助けをいただいたり、私一人では何もできないということを感じました。実習というのは、これまで大学で学んできたことの集大成を披露する場だと思っていました。しかし、実習を終えて振り返ってみると、大学で学べるのが全てでは無いということが分かりました。実際に実習に行き、子どもや保育者の方と関わって初めて理解できることもあります。私は幼稚園教育実習で3歳児・4歳児・5歳児クラスを順番に担当させていただき、その中で部分実習が2回、全日実習を1回経験させていただきました。実際に私がこの実習で学んだことを述べていきたいと思います。

まずは、子ども一人ひとりに合わせた保育を考えることの難しさです。大学の講義から何度も言われていたことでしたが、実際に何人もの子どもを目の前にすると咄嗟に援助が思いつかず、どうしたら良いのか分からなくなっていました。子どもに対する具体的な援助方法というのは、机上だけでは学びきれず、実習などを通して子どもたちと関わりながら模索していくものと学びました。まずは積極的に子どもと関わりながら信頼関係を築き子どもへの理解を深め、そこから援助方法を考えるというのが大切です。

次に、保護者の方との関わりのおおきさ、難しさです。子どもを預かる保育者として、園での子どもの様子をなるべく詳細に保護者の方へお伝えするというのは大切な仕事のひとつです。保護者の方と関わ

るタイミングとしては、子どもの送り迎えの際・日誌の交換などです。子どもが多ければ多いほど保護者の方の数も多くなり、一人ひとりと関われる時間はどんどん少なくなります。その中で子どもの園での様子や、どんなことをしていたのかなど短い時間で伝えるというのはとても難しいことです。保護者の方が安心できるような声掛けを、短い時間でも行えるスキルというのは、実習を通してとても大切だと学びました。

最後に、子どもの成長だけではなく、自分自身も常に成長していかなければならないということです。幼稚園実習終盤に、副園長先生と主任の先生と実習の振り返りをさせていただく機会がありました。その中で、私自身が思うように動けなかったこと、分からないことが沢山あり、保育者の方に何度も助けをいただいたことをお話しさせていただいたのですが、主任の先生からは「私もまだまだ勉強中だよ。これから現場で学んでいけば良いよ。」副園長先生からは、「最初から完璧にできる人はいない。時間をかけて理想に近づければ良い。」と仰っていただきました。主任の先生でさえ、日々学びがあるということにとっても驚きましたし、お二人からの言葉によりとても気が楽になりました。これから先も数多くの困難が待ち受けていると思います。言葉を胸に乗り越えていきたいと思います。

末筆ですが、コロナ禍の中実習を受け入れて下さった甲南すこやかこども園の園長先生や諸先生方、並びに、実習に行くにあたってご指導いたした諸先生方に感謝いたします。

(実習期間:2023年9月4日~25日)

幼稚園教育実習を通して学んだ事

高橋 はな

1. 幼稚園選び

本4回生で幼稚園実習に行く私は、目標を持って実習を行いたいと考え、その目標に合うよう園選びから考えました。自分が考えたテーマは「どのような時に子どもたちの心が動き、また保育者の心が動くのかを観察し、子どもの心の育み方を学ぶ」ことでした。実習園は、自然の中で遊び育つ中で、子どもに心に重きをおいた園であると感じたため、この園に行き学びたいと思いました。

2. 実習での学び

実習中に学んだことは、子ども自身が自分もやってみたい、1人でやってみようと思えることが学びの深まるきっかけとなるのだと学びました。そして、子どもの学びを深めるためには、保育者が意図を持った遊びや活動を行う必要があるのだと学びました。保育者は子どもにどんな力を身につけて欲しいから今の遊びや活動をするのかという部分を持っていないければ、子どもの学びが深まる遊びの展開や声掛けが行えなくなると思ったからです。また、子どもの心を育む点においては、普段の何気ない活動の子どものつぶやきに立ち止まり、今の気持ちがどんな気持ちなのかを子どもと保育者が共に考えたり、絵本や保育者自身の経験談を通して伝えることで、子どもの中で今の自分自身の気持ちに気づけたり、相手の気持ちを知ろうとするきっかけにもなるのだと学びました。

3. 今後に向けて

三週間の幼稚園実習を通して、私は将来「子どもの心を育む」教育者になりたいと強く感じました。実習に行く以前から、心を育める教育者になりたいと考えていたのですが、その方法を具現化できずにいました。しかし、教育実習で入らせていただいた担任の保育者が絵本や保育者のお話を通して子どもの心を育む姿を見て、自分が行いたい保育・教育というものをより具体的に考えられるようになりました。実習を通し、子どもの心は日々の生活や小さなきっかけで育まれていくものなのだと感じました。日々の些細な出来事に保育者が立ち止まり、そこで子どもたちが自分自身で感じられたり、考えられたりできるような、子どもに寄り添った援助を行うことで心が育まれているのだと感じました。私も教育者になった際は、日々の些細な出来事を見逃すことなく、子どもの気持ちに寄り添った活動を展開したり、子どもに伝わる工夫を行い、「心」を育めるような教育者になりたいと思います。

実際には卒業後、小学校の教師になることが決まっています。しかし、保幼小連携の取り組みや、小学校学習指導要領の第1章総則、の中にあるように、幼児からの育ちを引き継いでカリキュラムを組む必要性が明記され、特に、「小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」とあります。今回の幼稚園実習での学びは、今後の小学校教師としても活かせるものだと思います。また、「子どもの心を育む」点においては、遊びや教科の中から広がるものや子ども同士や教師との関わりから広がり、育まれていくものであると考えています。日々の授業に意図を持ち、常に子どもの「心」に寄り添い、豊かな心が広がり育まれるような環境づくりや授業づくりを行っていきたいと思います。

このように、私の幼稚園教育実習は、改めて教育者への思いを強く持つことが出来たと共に、学ぶ姿勢を持ちつづけた教師になりたいと思うことのできた経験でした。

(実習期間:2023年9月4日～27日)

施設実習を終えて

山本 愛代

私は児童養護施設に実習に行かせていただきました。児童養護施設は保護者のいない子どもや、虐待を受けている子どもなど、保護者に監護させることが適切でない児童に対し、安定した生活環境を整えるとともに、生活指導、学習指導、家庭環境の調整等を行いつつ養育を行い、児童の心身の健やかな成長とその自立を支援するための場所です。授業で児童養護施設について学びましたが、実際どのような仕事や支援をするのか分かりませんでした。そのうえ私は、元々積極的に話しかけたり、自分から人と関わるのが苦手だったので、実習でどのように子どもたちに接したらよいかわからず、子どもと関わることに不安を感じ、とても緊張していました。

10日間の実習を通して「積極的に根気よく子どもと関わる」ということを学びました。施設で暮らしている子どもたちは、辛い過去があり、様々な悩みや不安を抱えている子どもが多く、他人にあまり心を開かない子どももいます。話しかけても言葉を返してもらえなかったり、私の行動を観察し様子をうかがう子どももいました。私の緊張と不安が子どもに伝わってしまうと更に関わりにくくなると思ったので、意識して積極的に話しかけたり、関わりを持つよう προσπάひしました。しかし、拒絶されてしまい、それ以降話しかけることが怖くなってしまいました。落ち込みましたが、その日家に帰り、「子どもは実習生を試す行動をする」と授業で聞いたことを思い出しました。全く知らない人に対して、わざと冷たい態度をとったり、どんな対応をするか試すような行動をすることがあるのです。それからは「嫌われてもいい」「話してもらえなくてもいい」と、自分に言い聞かせながら、毎日挨拶し積極的に話しかけました。すると徐々に返事をしてもらえるようになりました。

実習最終日には「今日最後やろ。バイバイ」と子どもから話しかけてくれました。そのことが本当にうれしく「ようやく認めてもらえた」「心を開いてくれた」と思えました。そして、コミュニケーションの大切さを実感しました。実習に行くまでは、子どもと信頼関係を築きたくさん関わりたいと思っていましたが、信頼関係を築くことは本当に難しく簡単にはできない事でした。しかし、積極的に根気良く、時間をかけて関わることで、いつかは築けるものだと実感しました。実習生である以上、不安や心配事が多いのは当然のことです。「失敗したらどうしよう」「完璧にしないと」と思いますが、私は実習を通してたくさん失敗してもいいし、たくさん挑戦するものだと思います。様子を伺いすぎて子どもと関われなかったり、何もできないほうが良くないです。堂々としている方が、子どもも安心して関りを持とうとしてくれます。

10日間の実習という短い期間でしたが、実際に子どもと関わることで学べたことがたくさんありました。辛くしんどい思いもしましたが、それ以上に喜びや自分自身の成長を感じることができた実習でした。このような機会を与えてもらえたことに感謝しています。子どもと関わった時間は、かけがえのないもので、この経験は私のこれからの人生においてとても良い影響を与えてくれたと思います。この経験を活かしこれからも積極的に人と関わりたいと思います。

(実習期間:2023年3月21日～31日)

小学校の教育実習を経験して

中村 有理花

私はこの実習で、児童とのコミュニケーション・自分の授業の形を見つけることの2点を目標にしました。児童とのコミュニケーションの取り方を学ぶこと、実践することは、実際に小学校に来て児童と関わらないと学ぶことができないと感じたからです。そして、授業を重ねたり、先生方の授業を観察したりすることで、自分のしたい授業の形を見つけられると感じました。

1つ目の児童とのコミュニケーションは、一日でも早く、児童と打ち解けることから始まりました。様々な性格の児童を知り、自分から積極的に話しかけることを意識しました。また、名前を憶えて呼ぶことを心掛けました。1週間目が終わるころには、だんだんと話し掛けてくれる児童が増え、全員の名前を把握することができたと感じました。児童ともしっかりと話ができるようになるため、児童の好みを知ることもし始めました。好みを知り、自分がそれについて学んだり、教えたりしてもらうことで、会話が広がり、自分自身の知識も深まっていったと思います。

2つ目は、授業の形を見つけることです。将来、自分が教師になると決めた時、自分がする授業の形があまり思いつかず、少し不安を感じていました。授業の形を定めることで、児童が学びやすく、自分自身も高みを目指していけるのではないかと思います。先生方から授業を学び、自分の授業にとり入れることの繰り返しでした。その中からさらに研究し、自分のものにしていくため、これから先、学んだことを元にさらに研究していきたいと思います。

この教育実習をふり返って、改めて有意義な4週間だったと思います。運動会という大きなイベントにも準備から参加させていただいたので、その場で状況を判断し、臨機応変に動くことなども学ばせて

いただきました。また、運動会に向けてどんどん顔付きが変わっていく児童の様子も見ることができたのは、自分にとって大きな収穫だったと感じています。

実習を通して多くの児童や先生方と関わり、様々なことを学ぶことができました。何より、しんどいことや悩むこともたくさんあった中で、自分自身が楽しいと思えたこと、次の目標ができたことが一番の収穫だと思えました。

（9月24日～10月20日の期間 十津川村立十津川第一小学校で実習）

特別支援学校教育実習を通して 学んだこと

川内 梨央

1. はじめに

私は堺市立百舌鳥支援学校で教育実習を行った。私の主免許は幼稚園教諭、保育士であるが、特別支援学校教諭免許を取得するために特別支援学校での教育実習に臨んだ。保育実習ではなく、教育実習ということで、行くまではとても不安であった。しかし、先生方が親身になってご指導下さり、たくさんのことを学び、充実した教育実習となった。

百舌鳥支援学校は小学部、中学部があり、児童生徒総数は190名。私は小学部1年生を担当した。1年生の学習は朝の会から始まり、児童が一日の見通しを持つための大切な時間である。①はじめの挨拶②うた③出席しらべ④今日の予定⑤給食のメニュー⑥おたのしみ（手遊び・絵本・ゲームなど）⑦終わりの挨拶という流れで25分程度。こども園や保育園で行う朝の会と内容は同じようだが、障がいを持つ児童が注目できるような掛け声（手遊びのような）、絵や写真を使った視覚支援、カードを選んで貼りかえる等、様々な支援や配慮がされている。そして、朝の会の中で、出席人数、日にち、曜日、天気、給食のメニューを選んだり発表するなど、児童一人ひとりの力に合わせた活動を毎日繰り返し行う。朝の会について、「しんどくても面倒くさいなと思っても、しなければならないこと（仕事・役割）があるでしょ。子どもたちにもそれぞれ、自分の役割があって、毎日続けることが大切。」という担任の先生の言葉が、私の心に響いた。実習を通して私は、障がいを持つ児童に対して、できないことを手伝い、助けることが支援ではなく、どうすれば自分でできることが増えるのか、児童の成長に繋がるのか、手立てを考え

実践することが支援だということを学んだ。

持つ子、配慮を必要とする子に適切な自立支援ができる保育者になりたいという目標ができた。

2. 教育実習での日々

私が担当したクラスは、5名の児童が在籍している。簡単な言葉は理解しているが、自分の思いを言葉で伝えるのが難しく身振りや絵カード等を活用してコミュニケーションをとっている。発達は1～2歳児と同じくらいで、最初は散歩で手を繋ごうとするとどこかへ行ってしまったり、給食で食事の援助をしようとする時と駄々をこねられたりと苦戦した。私のことを試しているのだと担任の先生から言われ、心を開いてもらえるよう、とにかく自分自身が子どもたちを受け入れようと努力し、様子を見ながらコミュニケーションをはかった。そうすることで意外と早く馴れてくれ、それを実感できる出来事が本当に嬉しかった。

研究授業は朝の会を行い、その中の④おたのしみでは、児童が興味を持っていた“色”をテーマにし「どんないろがすき」の歌に合わせて手作りの手袋シアターで興味のあることに集中したり、コミュニケーションを取る楽しさ、表現する力に繋がるよう計画を立てた。また、大きなクレヨンカードを用意し、白い風船が塗った色へと変化する仕掛けで、塗り絵ごっこを楽しみ、色への興味や認識を広げることをねらいに何度も実施案を修正し、仕上げた。苦労した分、達成感を味わうことができ、先生方からお褒めの言葉もいただいて自信にも繋がった。

3. おわりに

私が目指しているのは、こども園で保育教諭として働くことである。保護者が就労する場合、障がいを持つ子や配慮を必要とする子もこども園に入所する。その際、健常児の中で過ごすことがその子たちの“障害”となってはならない。今回の実習で、先生方が児童一人ひとりの自立支援を計画、実践されている姿と熱意に感銘を受け、こども園で障がいを

教育実習を終えて

三浦 蓮一郎

1. 実習校について

私は、5月29日から6月17日までの3週間、母校である学校法人箕面学園高等学校で教育実習を行いました。実習先として母校を選んだ理由は、私の恩師である柔道部の監督が勤務していること、教師になりたいと思うきっかけを与えてくださった先生がいることが挙げられます。

クラス担当は、31人で編成されている1年5組でした。担任の先生は女子柔道部の監督で、副担任の先生は高校時代の私の担任でした。公民科の教科担当は剣道部の監督であり、在学当時に私も授業を受けました。

2. 実習内容の概要

担当のクラスでは、朝の点呼、移動授業の際の鍵閉め、終礼、放課後の掃除などを行いました。公民科の授業は、1組、2組、3組を担当させていただきました。部活指導では柔道部の練習に参加し、実技指導もしました。

実習を通して、生徒とのコミュニケーションの大切さを実感しました。信頼関係を築くことができれば、生徒は授業中にも積極的に手を上げ、質問や回答をしてくれるからです。その為に心がけたことは、他の先生が行っている授業を参観し、授業について学ぶとともに、生徒たちに顔をおぼえてもらうことでした。休み時間にもできるだけ多くの生徒と交流を持ちました。一人の生徒と関係を深めると、その一人からさらにもう一人、さらにもう一人と増えていき、輪が広がりました。

3. 経験と学び

実習中、特に印象深かいできごとは、天候不良に伴う学校の対応でした。その日は悪天候と交通機関の遅延運休等が予想され、急遽2限目からの休校が決まりました。当日の朝、校長先生を中心にチーム学校として迅速に状況を評価し、生徒の安全を最優先にした決定がなされました。この決定プロセスは、緊急事態への対応能力を身につけられる貴重な機会となりました。教員や生徒たちへ休校を通知する方法や、授業計画をすみやかに変更するという対応も経験できました。

実習を通じて改善をしたいと感じたことは、朝礼や終礼での発表におけるメリハリと、実習中に時折見せてしまった消極的な態度です。これらの課題は、生徒への影響を考えると重要なポイントであると感じています。朝礼や終礼で、私の発言が一定のトーンとなってしまう、生徒たちの関心を引くことが十分にできていませんでした。スピーチの内容もより生徒たちの関心を引くようなものにする必要がありました。また、教師の態度は生徒に大きな影響を与えるため、積極的にエネルギーを注ぎ出すことが重要だと実感しました。

4. 研究授業について

研究授業で意識した点は、声の大きさ、机間巡視、筆記時間、生徒の自主性です。一つ目の声の大きさについては、生徒の注意を引きつけ、情報の伝達を確実にするために意識しました。二つ目の机間巡視については、授業に取り残されている生徒の確認と、授業への参加意欲を促進するために意識しました。三つ目の筆記時間については、字を書く速さは生徒によって異なるため、全員が同じ内容を理解し、記入できるように机間巡視と合わせて意識しました。四つ目の生徒の自主性については、生徒自らが積極的に授業に関わることで、学習意欲の向上につながり、生徒の理解が深まると考え意識しました。具体

的には生徒に発問したとき、自主的に手を挙げる生徒に発言や回答をしてもらいました。

研究授業を参観いただいた先生方から、意識した四つの点を高く評価していただきました。一方で授業内容に関する引き出しをもっと多くすべきであるとの指摘をいただきました。今後授業をする機会があれば、教材研究を今まで以上に深めたうえで、今回意識した四つの点も取り入れたいと思っています。

5. 結論

教育実習は、私にとって教師としての基礎を学ぶ貴重な機会でした。生徒とのコミュニケーションの重要性、緊急時の対応力、授業の難しさと楽しさを経験できました。これらの経験を活かし、より一層生徒の理解を深めることができる教師を目指します。

この実習を通じて支援と指導をしてくださった先生方、そして私と共に学んでくれた生徒たちに深く感謝します。

教育実習で感じたこと

北井 万由実

私は、5月29日～6月16日までの3週間、母校である神戸市立押部谷中学校に教育実習にいかせていただきました。この3週間の実習でたくさんの経験と教員のやりがいを見つけることができました。

担当の学年は1年生を担当しましたが、授業は1年生と2年生の保健体育を担当しました。初日はいろんな先生方の講話があり、お話を聞いて感じたことは、教員は生徒のために学ぶ環境を作り、年間行事や授業を考えている。それだけ生徒を思いながらお仕事をされているのだと感じました。大変なお仕事だと思いましたが、生徒が成長する姿を見ることができ、やりがいのあるお仕事であると思いました。実習が始まった最初の3日間は、主に授業見学をしました。実際の現場を目にしたとき驚いたことは全生徒にパソコンが普及されていたことです。私の時は教科書とノートで授業をしていましたが、今では全員パソコンを持ち電子黒板で授業を行っていました。宿題などもパソコンで行って提出する形になっていました。こんなにも進化しているのだと知りました。そして生徒が積極的に元気よく手を挙げて問題を解こうとする姿を見て、その元気の良さに圧倒されました。また、授業見学をさせていただく中で、各先生方が授業を行う上でたくさん工夫されているところを見つけることができました。

初日からたくさんの生徒に声をかけてもらい部活動にも見学させていただきました。

4日目から本格的に授業をすることになり、実際にしてみると思うようにいかないことが多々ありました。大学で何度も模擬授業をしましたが初めての50分授業ということもあり、戸惑いもあり何とか終わったという感じでした。初めての授業で担当の先生には良かった点も改善する点もたくさん教えて頂

きました。反省点を次の授業では改善していき前よりさらにいい授業をしようと取り組みました。

1 週目が終わり、2 週目からは体育だけでなく保健や道徳の授業も始まりました。道徳は初めてのことで、指導案から苦戦しましたが生徒に学んでほしいこと、理解してほしいことを考えてみるとたくさん知ってほしいことを見つけることができました。初めての座学を教える授業ではパワーポイントを利用し、動画も用いて生徒が授業に興味をもってくれるようにたくさんの工夫をしました。初めての道徳では時間配慮ができず伝えたいことが伝えきれないまま終わってしまいましたが、生徒からは「おもしろかった」「楽しかった」と言ってくれました。生徒からの言葉に力をもらい、次も頑張ろうと思えました。また、保健の授業でも動画を使用しました。動画だけでなく私自身の体験談を話すことで生徒は理解しやすく、また身近に感じてもらうことができました。

2 週目に入ってから生徒とも関わる時間も増え、たくさんの生徒と関わることができました。実習を通して生徒と関わる楽しさに気づきましたが、教員側としてメリハリをつけて立場を考えて接していくこと。生徒と関わっていく上で楽しく接することも大事ですが、教員としての立場も考えて接していかななくてはいけないと感じました。2 週目では授業だけでなく人間関係や生徒との関わり方も学ぶことができました。

3 週目に入り、授業にも慣れ生徒ともさらに親しく接する週になりました。またこの週は体育と道徳の研究授業がありました。また私は実習生代表で大批評授業（研究授業）もあり、とても大変な週になりました。たくさんの先生方が授業を見に来てくださり、緊張しましたが自分に自信をもって最後まで良い流れで終えることができました。実習の視察にこられた大学の先生から「こんな元気よく授業に取り組む生徒を見たのは初めてだ」と押部谷中学校の生徒の魅力にも気づいてくださり、生徒の良さを引き出せた授業ができたと思います。道徳では1回目

で行った時に時間配慮や伝えきれていなかったこと
の反省点を活かし、時間配慮も改めて考え直し伝えることができました。伝えることはこんなに難しいものだと知りましたが、伝わる嬉しさも込み上げてきました。

教育実習でたくさんの知識を得ることができ、先生方にたくさんのご指導をいただきました。また、現場でしかできないことも体験させていただきました。大変なことの方が多かったですがそれが楽しいという気持ちでいっぱいでした。この実習を通して感じたことは、教員は教える立場でもありますが、学ぶこともできる環境であることです。生徒と接する楽しさもありますが、生徒から学ぶこともたくさんあるのだと気づきました。

一つ生徒との関わりで心に残った出来事があります。少し手のかかる生徒でしたが、関わっていく中でその生徒のいい一面を知ることができました。普段はホームルームも受けず、授業にも遅れて来る生徒でしたが、私が誤って花瓶を割ってしまったときに雑巾を持って誰よりもいち早く駆けつけてくれました。また、その生徒は陸上競技部でトラックを走るルートに小さい防球ネットが置いてあることに気が付き、早く走って邪魔にならないように移動しているところを見かけました。その行動に人一倍気遣いのできる生徒であると知りました。教育実習の最終日にはお手紙をくれるなど素直な一面を見せてくれました。誰にもいい面が備わっていてそれを認めたり、引き出したり、伸ばしたりすることでその生徒が生き生きとする様子を見るにつれて、これも教育者の醍醐味のひとつかなと感じました。担当の先生方にも恵まれ、いい経験をさせていただきましたことに感謝しています。私は教員にはならず、一般企業に就職しますが、この実習で教員になりたいという気持ちが強くなり、いつか保健体育の教員になるという目標ができました。この実習で学んだことを活かしていき自分自身更なる成長をしていきたいと思えます。改めて教育実習に行けた環境に感謝をいたします。本当にありがとうございました。

教育実習で学んだこと

近藤 征哉

私は、5月29日から6月17日までの3週間、母校である京都共栄学園高等学校で教育実習をさせて頂きました。新型コロナウイルスがまだ流行している中、快く実習を受けて頂き、心から感謝しています。実習の3週間は自分の人生の中で大きな経験の一つとして貴重なものになりました。

私は3年2組のスポーツクラスとサッカー部の顧問を担当させていただくことになり、最初の朝のHRではガチガチに緊張し、声も小さく、生徒たち全体を見ながら話せず、印象があまり良くなかったかもしれません。サッカー部では、OBなのでお世話になった監督・先生がいたこともあり、なんとか和めていたかなと思います。しかし、生徒たちはそんな私でも気を遣い話しかけてくれる生徒が多く、実習初日から生徒たちに助けられ、支えられていました。授業では、1週目という事もあり、見学をメインに各担当教科の先生たちを見て学んだり、アドバイスをもらったり、色々と吸収できましたし、授業を初めからやらせて頂ける機会を与えて貰ったりと先生の大変さを痛感した1週間になりました。

2週目では、自分が前に立って保健体育の授業を行いました。主に、バレーボールを教え、スポーツテストや選択授業、柔道などに携わり、保健では運動・食事の健康についての授業をしました。指導案作成・部活・清掃活動など時間がない中で授業のクオリティを上げたかったのですが、ただこなしているだけの指導案や何を伝えたいのか、生徒が楽しく授業を受けられる工夫が全くできず、細部までこだわった授業を作るには、長い時間と相手の気持ちになって考えられる能力がとても大切だという事を学びました。サッカー部では指導に慣れ始めてきて、GKの指導を任せられて、何か一つでも得てもらえるよ

うに自分の持っている知識と経験を伝えていました。また、GKとフィールドプレイヤーとの連携が課題であったため、GKだけではなくフィールドプレイヤーにもアドバイスをし、徐々に信頼も得られて、自分の立場を確立できていたのではないかと思います。そんな中で生徒たちとの距離が近くなり、話しかけてくれる生徒が多くなりました。他の先生たちよりも年が近いので、友達感覚で話してしまいそうになるのですが、距離感をしっかりと保ちながら生徒たちと仲良く慣れ始めてきた2週目でした。

いよいよ3週目で、研究授業の準備をしながら、他の授業や部活でのメニューなどの準備も進めて行かなければならなかったのも、ものすごく過酷な3週目でした。研究授業も自分が納得のいく授業にはできなかったし、LHRでは準備が全くできていないまま臨むことになり、準備不足が目立ちました。その中でも、授業の仕方や話し方などについては成長を感じましたが、それをもう少し活かせる教材研究や授業構成など授業を始めるまでの準備が圧倒的に悪く、教育実習の一番の反省点になるかと思います。しかし、挑戦してみないと分からないものは必ずあるし、そこからどう次に生かすかだと思うので、これからの人生では「準備」を意識して物事を進めて行かなければならないことを学びました。サッカー部では、公式戦に帯同し、試合前のミーティングやアップ、書類確認や相手への挨拶、試合の指示など顧問の経験をでき、結果は勝てなかったのですが、試合の中で成長を感じるプレーがあったので、これが教員のやりがい・魅力なのだと感じました。

教育実習で色々な経験ができ教師に必要なことだけではなく、社会で生きていく中で必要な事を多く学びました。また、ここでは語れていない部分が沢山あります。生徒たちの優しい心を持った人間性に助けられ、無事に教育実習を終えることができました。自分にとってとても貴重な時間で、実習中ではかけがえの無い物になりました。私はもっとこうしておけば良かったなと後悔することがあり、実際に経験しないと分からないことではありますが、その

後悔の幅を少なくするように今を全力で生きていかないといけないと学びました。今を生きないと未来はないと思うし、自分の成長に繋がらないと思いません。なので、何事にも前向きに挑戦し続けて、そこで失敗や成功を繰り返して、人は強く、成長していくことを感じ、そのためには様々な事を知ったり、準備をしたりする事をこの実習で学びましたので、この経験を糧に前向きに人生をより良いものにして行きたいなと思えた教育実習でした。改めて教育実習に行けた環境に感謝し、これからも精進していきたいと思います。本当にありがとうございました。

学校インターンシップを経験して

荒川 奏

私は9回のインターンシップに行って体験したことで感じたこと考えたことがたくさんあります。

まず、どんなめあてを持って学校インターンシップに臨んだかということそれは教育実習の事前学習です。なぜそう思ったかということ先生として大事なことを学びたかったからです。2時間少しという短い時間で先生の仕事(声かけ、まるつけ、朝の会の話)をいろいろと見せてもらいました。その中でいろいろなことに気がつき、学び得たことがたくさんありました。

1 つ目に学び得たことは先生という存在の大切さです。クラスが荒れていたり、うるさかったり、まとまりがなく集団で団結できなかつたりしたり困っているときはやはり先生がいてこそそのクラスであり学級だと思いました。

2 つ目に学び得たことは特別支援学校(学級)の先生が予想してた以上に大変で辛くてメンタルがやられ体力を消耗するので私自身を鍛えなければならないということです。私はこれが1番学び得たことだと実感しています。なぜそう思い感じたかということ私自身が将来1番就きたい職であり学びたいことだからです。私はほとんど4年生の支援対象の男子児童を担当していたのでそれこそ良い学びになり勉強になりました。インターンシップに行く前に主に特別支援の先生になる勉強をさせていただきたいと大学の先生から小学校の先生に伝えてくださって特別支援のを中心に勉強できました。インターンシップではほとんどが4年生の男子児童を担当し1回だけ1、2年生を見ました。やはりそのおかげで学校の教育現場と特別支援の児童との関わり方や接し方を学び、身につけることができました。どういうことに気がつき学んだかということ接し方、言い方です。特別支援の仕事内容や勉強内容、知識は大学で学んだり、大学の授業で体感することはできますが

実際の学校現場に行き支援対象の児童を見て接して対応することはすごく大変であり難しいと思いました。例えば4年生の男子児童を担当して思ったことや考えたことは接し方や対応の仕方を臨機応変にしなければいけないということです。インターンシップを通して経験したことはやはり特別支援の大変さです。いつも4年生の男子児童を見て接して経験したことは体力やメンタルや言い方や接し方を常に研究し小学校の先生に現状を伝え対処法を教してもらったり特に体力を鍛えるということです。授業が始まっても授業の用意をしなかったり、板書を写さなかったり、プリントの穴埋めをしなかったり、集中がきれ落ちつきがなくなり床に寝転んだりして椅子に戻り座っていることができず最初はどのようにしたら対応したら良いか分かりませんでした。その時小学校の特別支援関係の先生にアドバイスをもらいました。次に大変だったことは常に様子を見ておいて児童を見ておかないとすぐに教室を飛び出しなくなってしまうことです。特別支援の児童といえは常に落ち着きがなく走り回ってどこに行ったか分からなくなってしまうことを予想はしていましたが、こんなに大変でしんどいとは思いませんでした。毎回小学校の様々な場所を探し回ったり児童を見ることが精一杯で追いかけてたりして学校全体を歩き回っていました。そして1番しんどくて辛かったことは私が入れない場所に行き中に入ってしまったことです。私はその時何もできず「そこは危ないよ」と口で伝えただけでした。私は何も出来ない自分が悔しかったです。しばらくすると戻ってくると思っておりましたが、全然戻ってこなかったため私はあちこち探し回りました。すると知らない間に教室にいました。私はほっとして安心しました。私は特別支援の先生がこんなに辛くてしんどくてメンタルや体力を使う仕事を諦めず決して児童の前では弱音を吐かずに仕事をしているのがすごいと思いました。

3つ目は優しく言うだけでは何も支援にならず伝わらないということです。特別支援と言えば優しく穏やかなイメージが強いと思っていましたが、そうではありませんでした。もちろん一般の児童よりは優しく丁寧にはっきりとゆっくりと分かりやすく伝えたりしなければいけません、優しくするだ

けが特別支援ではないということです。なぜそう思ったかというと私自身が4年生の男子児童を担当している時、上手く支援ができず困っていて小学校の支援関係の先生に相談したら少し言い方を変えたり、口調を変えたり駄目な時はだめとはっきりと言ったりして次の授業の準備を最初から用意しておけば少しは変わる等の大変参考になる素晴らしいアドバイスを頂きました。そして私はいつもと同じ接し方より少し言い方を変えて駄目なことをした時はそれなりの言い方をしたりはじめをつけて物事に取り組んでほしいときはしっかりと伝えました。それが少しは伝わり本人もいつもよりかはびしっと姿勢になり、鉛筆をもち板書やノートの書き写し始めた時は嬉しかったです。

4つ目は支援の児童を支えているのは先生だけではないということです。私がいつも通り男子児童に助言しても行動してくれず困っている時でした。男子児童の隣の席の女子児童が手助けをして板書をさせていたのです。私はとても感動しました。クラスの児童たちも支援を手伝ったりして助けあったりしてすごく良いと思いました。このようにインターンシップに行かせていただいていた皆さんのことを学んだり実感したり体験させていただきました。次このような機械があるのは3年生の教育実習です。今回教えてもらったこと、身につけたこと、インターンシップで学んだことを教育実習で生かしていきたいです。今回のインターンシップは私にとってとても良い、勉強、体験になり良い時間を過ごせました。

公立保育教諭採用試験に合格して

池田 美咲

1. 採用試験までの対策

私は最初どこへ就職するか絞れていませんでしたが何が試験内容になっても対応できるように採用試験の対策をしていました。例えば、面接練習に参加したり、基礎教養の勉強をしたりしていました。

面接練習では最初によく聞かれる質問をまとめられたものを参考にしながら自分が何を伝えたいのか考えたり、まとめたりすることから始めました。ここで私は一言一句内容を作るのではなく伝えたいことと大まかな内容を箇条書きにして実践練習を行いました。なぜなら、自分が考えた台本を丸覚えするとその場で忘れてしまった時に慌ててしまうからです。このようにして実践練習をするとすらすらと流暢に話すことができているとは言えないかもしれませんが自分の思いを一生懸命伝えようとしていることもより伝わると分かりました。また、伝えたいことの文章を忘れて伝えられなかったということが確実に減ったので自分に合っていたと感じています。

基礎教養では希望者が参加できる補講のようなものがあつたのでそれを活用しながら勉強しました。

受ける所を絞ってから試験内容を確認して、論作文の練習を始めました。いくつか書いてみて書くことに慣れるようにしました。また、内容として自分の軸となるものを決めてどんな問題が来ても自分が軸としているものを中心に文章構成していくようにしました。

本番ではできるだけ落ち着いてできるように深呼吸をしたり、不安な思いをポジティブに考えたりしていました。また、何度も練習をしたことや良かったところを指導者から聞いて自信を得たことも落ち着いて面接ができたのだと考えます。そのおかげ

で面接では自分が伝えたいことを伝えることができ、無事合格することができました。

2. その他の役に立ったこと

卒業論文は自分が好きで得意な仕事を題材として、造形表現と子どもの発達についてまとめました。研究結果として仕事をすることによって子どもたちは楽しみながら他者とコミュニケーションをとったり、想像力を養ったりしていることが分かりました。卒業論文を書くことによって自分の経験やこれまで学んできたことの復習ができたことに加えて自分がそれをどのように生かしたいのか考えをまとめることができました。自分が好きな工作についての理解を深めた結果自分の強みを見つけることができ、面接でも自分が子ども達にどんなことをしたいかを伝えることができました。

3. 最後に

これまで学んできた知識や経験は自分の成長にも大きく影響し関わったと思います。今後の目標として、私はこれまで学んできたことを活かし、子どもたちが安心して楽しく園に通うことができるために、教員の一員として頑張っていこうと思っています。

最後に、お忙しい中、対策講座やゼミ等でご指導頂いた諸先生方に感謝いたします。

小学校教員採用試験に合格して

荒川 季奈

私は、大阪市と千葉県・千葉市の教員採用試験に合格しました。この結果は、たくさんの先生方の支えもあり、得られたものです。

私が教員採用試験を受験するにあたって大事だと感じたことは、自分自身で環境を整えることです。自分が一番教員採用試験に集中できると思える環境で過ごさなければ、モチベーションも上がらず、実際に私も頑張ることができませんでした。ですが、試験勉強以外のことに区切りをつけたり、自分の集中できる環境を作ったりすることで万全な状態で試験に臨むことができました。集中できる環境は人それぞれですが、試験が終わるまでは教員採用試験を第一に考えて過ごすことが、合格につながる道だと思います。

複数受験をしてみてたくさん感じたことがあります。私は第一希望が大阪市、第二希望が千葉県・千葉市でした。

まず、メリットとしては、第一希望の自治体の練習になることです。試験会場に慣れることや集団討議・面接の練習にもなりました。また、倍率の低い自治体を受けることにより、新卒で先生になれる確率が上がることも複数受験の良い点だと思います。

デメリットとしては、自治体によって試験の項目が違うことから、準備しないといけない範囲が増えてしまうことです。自治体によって、求める教員像や教育の特徴が違ったりすることが大変だと思います。また千葉県・千葉市などのように遠いところを受験してしまうと、行くのに費用がかかることもあります。良い点も悪い点もありますが、私は複数受験をして無駄だと思ったことはひとつもなかったのによかったと思います。

最も合格につながったと思うことは、教員採用試

験対策講座にきちんと出席したことです。春休みと夏休みに開かれる講座ですが、ほぼ毎日出席しました。私は勉強も得意ではないのに本格的に勉強し始めたのも遅く、スタートラインにも立てていないような状態でした。ですが、教採対策講座に繰り返し出席することで少しずつ、試験に必要な力が身についたと思います。5教科の講座もすぐ役に立ちましたが、特に面接の講座は成長しているのを実感することができました。教採対策講座が開講されていないときも、先生方に面接個人レッスンをさせていただき、たくさんご指導いただきました。そのおかげで、本番では自信をもつことができ、100%の力を発揮することができました。とても感謝しています。

4月から大阪市の小学校の教員として働いていきます。子どもたちと真剣に向き合える先生になれることが目標です。芦屋大学では、先生になるための知識も学んだのですが、先生方の学生に対する姿勢もとても勉強になりました。私も、芦屋大学の先生方のように子どもたちのことをきちんと理解し、向かい合える先生になれるよう頑張ります。まだまだ未熟で、知識も経験も足りないことばかりですが積極的にたくさん学び、成長していきたいと思っています。

小学校教員採用試験に合格して

橋本 愛花

令和6年度教員採用試験の合格を頂く事ができました。教員採用試験を受けると決めてから結果が出るまで長期間でとても大変だったけれど今では、自分に自信を持つことができ嬉しく思います。教員採用試験を受けると決めてからどこの自治体を受けるのかすごく悩みました。自分の得意分野の試験内容、新生活を送る時に住みたい場所、教育理念、試験日程など様々な自治体の説明会やパンフレットをみたり、先生方に相談したり、友達の意見を聞いたり、とにかく情報を自分で集め、なぜここにしたいのか明確に自分が納得できるまで悩み続けました。悩んでいる途中でも試験対策の授業があったため受けた所候補の試験内容を履修し、どんな試験でも対応できるようにしていました。また、3年の春休み対策講座、夏休みの対策講座を受け、自分の中で目標や一日の計画を決め、取り組みました。講座の中では、難しい問題や自治体の過去問を挑戦し、解けなくてもとにかく向き合い解き方や考え方を先生や友達に聞くことを大切にしました。

面接練習では、とにかく話したい事を口にしてままとめていく、文章にするのではなく、内容をその時に話せるようにひたすら練習する事を大切にしました。

家では、今日解いた問題を1人で解くこと、参考書を使って基礎問題を定着させる事など夜遅くまで取り組みました。朝起きるのが苦手だったため、大学での講座には必ず間に合うように起き、夜に勉強する習慣で自分に合った生活習慣で取り組みました。次の日には、疑問や解けなかった問題を自分の口で何が分からなかったのか説明できる状態で学校に行く事を心がけました。スクールバスに乗っている間もYouTubeや資料を見たりしました。たまには、自

分の好きなアニメや音楽を聞いて息抜きをしていました。複数の自治体を受けた理由として、試験会場や試験問題、面接の雰囲気など本命の試験の時に堂々と受けられるようにする事、もし、落ちてしまっても別の自治体でもいいからどうしても教員をしたかったため受けました。複数の自治体を受けた事で自信を持って面接を受ける事ができ合格に繋がったのではないかと思います。実技試験の練習で何度かプールで泳ぎ気分転換にもなりました。

結果が出るまでソワソワしていましたが2つの自治体で合格を頂く事ができ来年度から小学校教員になります。4月から自分らしく笑顔を忘れず、児童の気持ちを大切にし、やる気を引き出し、面白い授業や楽しい学校生活に出来るよう責任を持ち、何事にも挑戦できる員になりたいです。自分の強みや性格、頑張ってきた事やこれからどんな先生になりたいのか教員採用試験の対策講座を受けて明確にすることができたので受けて良かったです。また、教員と一緒に目指す仲間と助け合い、励まし合い、時には、競い合い、負けたくないという気持ちや先生方の厳しい指導のおかげでメンタルも強くなったと思います。

特別支援学校 合格までの道のり

福岡 歩美

1. はじめに

私は、大阪府特別支援学校小学部に合格しました。小学5年生の時から、特別支援学校の教師になる夢を追い続け、教員採用試験に合格し、教師というスタート地点に立つことができました。教員採用試験は、面接・模擬授業・小論文・5教科目など、自治体によって内容に違いがあり、私は大阪府で働きたい気持ちが強く、上記4つの試験を受けました。こんなに多い試験内容で、自分には両立して勉強できないと思い、諦めかけた時期もありました。しかし、この大学4年間で、小学校や特別支援学校の教育実習、学校ボランティアや放課後等デイサービスなど、実際に教育現場で子どもや教師、保護者、地域の方々と関わり、様々な経験をしました。その経験を生かし、子ども一人ひとりに寄り添い、個に応じた教育をしていきたいと思い、夢を諦めず教員採用試験に挑みました。

2. 試験勉強について

芦屋大学児童教育学科には、とても良い学習環境があり、教員採用試験対策講座の授業を受け続けることで、自信を持って試験本番に臨むことができました。私は、面接がとても苦手で、自分の思いをまとめることができても上手に話せなかったり、他の人と比べて、自分の意見を恥ずかしいと思ったり、面接の授業を避けるように勉強していました。しかし、そんな逃げている自分に嫌気がさし、とりあえず思ったことや考えていることを単語でもいいので言ってみたり、先生にアドバイスを求めたり、友達の参考になる言葉を真似したり、自分の良い所を友

達に教えてもらったりしました。そうすると、徐々に文章で伝えることができ、どんな質問に対してもゆっくり考え整理しながらポジティブな気持ちで答えられるようになりました。また、自分が面接官に伝えたいことは何度も声に出して練習し、先生や友達に繰り返し聞いてもらうことで更に自信につながり、心に余裕ができ面接に取り組むことができました。

3. 頑張ったこと

私が特に力を入れて取り組んだのは模擬授業です。教育実習や大学の講義の中でたくさんの模擬授業をしてきました。大阪府教員採用試験の模擬授業は4分30秒です。こんなに少ない時間なら余裕に授業できると私は甘く考えていました。大阪府から授業内容の課題が提示され、それに沿った授業をしなければなりません。私は先生にアドバイスを貰いながら指導案を一から作成し、子ども一人ひとりの実態に応じた授業を展開できるように授業を考えました。先生や友達にいくつか授業を見てもらい、自分が自信を持って授業ができる内容に出会い、声の大きさ、顔の表情、スピード感、身振りや手振り、教材など、あらゆる点を意識しながら、実際に子どもと関わるような授業になるために何度も練習をしました。最初から上手くはできず、悔しい場面もありました。しかし、そんな時に思い浮かぶのは、叶えたい夢を諦めたくないという気持ちです。初心の気持ちを忘れず、挑戦する楽しさをこの教員採用試験を通して身につけることができました。

4. おわりに

私一人の力では、合格はできませんでした。もちろん、私自身、人生で勉強を真面目に取り組んだ期間は初めてと思うくらい教員採用試験に集中して取り組みました。しかし、頑張ることができた環境があったのは、教員採用試験対策講座を通して、必死に学生と向き合っ親身にアドバイスをくださった

先生方、一緒に頑張ろうと声をかけてくれた友達、
いつも見守ってくれた家族のおかげです。合格して
達成ではなく、これからが本当の教師人生のスター
トです。これからもっと大変なことを経験し悩んだ
り悔しいと思ったりすることがあると思います。し
かし、常に目標を持ち、子どもや教師、保護者、地
域の方々に信頼される教師を目指し、特別支援学校
で地に足をつけて頑張っていきたいと思います。

2. 優秀卒業論文抄録

スポーツ選手のモチベーションが下がったときの対処方法

山口 明莉
(指導教員：石川 峻)

1. はじめに

競技力向上や勝利につなげるため、人として成長するためにスポーツにモチベーションは必要である(日本スポーツ振興センター、online)。これは当然、大学のスポーツ選手にも当てはまることである。これまで大学スポーツ選手とモチベーションについての先行研究はいくつかみられる。

大学野球における休養とモチベーションの関係において、休みがなさ過ぎても、休みすぎてもモチベーションが下がるため、週に1~2回の休みが適切であると考えられている(中塚、2016)。休みの頻度や休みの過ごし方も大切ではあるが、最も重要なのは休みの日と練習の日との切り替えが大切である(中塚、2016) また、大学生バレーボール競技における試合時のモチベーション・精神状態の変化について、強いチームほど各選手の心理状態に大きな変化は見られないこと、各選手のモチベーション次第でチームのまとまりや勝敗に影響することが明らかにされている(遠藤、2017)。

これまでにモチベーションとスポーツの関係性は明らかにされているが、どのような状況でモチベーションが下がるのか、モチベーションが下がった際の対処方法については不明である。そこで、本研究では大学のスポーツ選手においてモチベーションが下がった際の状況と対処方法について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 対象

スポーツを実施している大学生 83 名を対象とした。対象者の性別は男子 22 名、女子 61 名、対象者の学年は 1 年生 23 名、2 年生 24 名、3 年生 16 名、4 年生 20 名である。

2.2 方法

Google フォームを用いて、アンケート調査を実施した。アンケートの内容は下記の通りである。

(1) 性別 (2) 学年 (3) あなたの部活での立ち位置を教えてください (4) 1 週間で何日練習していますか (5) 1 日の練習時間はどれくらいですか。(6) スポーツをする上でモチベーションは大切だと思いますか (7) 部活に行きたくないと思ったことがどの程度ありますか (8) どのようなときに行きたくないと感じましたか (9) 部活に行きたくないと感じたときどのように対処していますか

3. 結果と考察

表 1 は、部活に行きたくないと感じる際の記述例とその割合を表したものである。最も記述例が多かったのは体調不良で 14 個 (20.9%) であった。代表的な記述例として「体がだるい」や「生理の時」がある。2 番目は疲労で 13 個 (19.4%) であった。代表的な記述例として「身体が疲れているとき」や「疲労がたまっているとき」がある。3 番目はスランプで 12 個 (17.9%) であった。代表的な記述例として「プレーが上手くいかないとき」や「結果が出せないとき」がある。4 番目はメンタルの低下で 10 個 (14.9%) であった。代表的な記述例として「練習会場に行くのが面倒」や「競技がつまらなく感じる」がある。5 番目は人間関係で 7 個 (10.4%) であった。代表的な記述例として「仲間との気持ちの違い

でやる気をなくす」や「チームの雰囲気が悪い時」がある。

部活に行きたくない感じる原因で、最も記述例が多かったのは体調不良であった。代表的な記述例として「体がだるい」や「生理の時」がある。

平沼（2022）は、女性の生理について以下のように述べている。

「月経が正常でも、月経周期によりいろいろな体調不良を生じる。特に月経前および月経時に症状が強く生じる。月経前症候群とは、月経前3~10日ほど続く精神的、身体的症状のことで、精神的症状としては、気分の落ち込み、不眠、イライラ、食欲不振など、身体的症状としては、頭痛、腰痛、むくみ、乳房や腹部の張りなどの症状がでる。また、女性は、

太ることを気にして、食事を制限、場合によっては摂食障害になり、精神的ストレス、不規則な食生活、睡眠不足で体調を崩し、トレーニングを行ってもトレーニング効果は上がらず、疲労は回復せず蓄積して、疲労骨折を起こす。」

以上の記述から、女性は特に月経前から月経時にメンタルや体調不良を感じ練習に身が入らないことが多いと考えられる。体の状態が良くない状態でスポーツを行うと集中力に欠けることやパフォーマンスが低下することが言える。そこで、健康観察表を作り無理に練習に取り組むことがないようにする、監督やチームメイトとの信頼関係を築いておく必要があると考える。また、男性指導者の女性の生理へ

項目	代表的な記述例	記述数とその割合	
		記述数(個)	割合(%)
体調不良	体がだるい	14	20.9%
	生理や体調がすぐれないとき		
	痛いところがあるとき		
疲労	身体が疲れているとき	13	19.4%
	疲労がたまっているとき		
	授業などで疲れているとき		
スランプ	プレーが上手くいかないとき	12	17.9%
	成長を感じられないとき		
	結果が出せないとき		
メンタルの低下	練習会場に行くのがめんどくさい	10	14.9%
	競技がつまらなく感じる		
	モチベーションが下がってめんどくさい時		
人間関係	仲間との気持ちの違いでやる気をなくす	7	10.4%
	チームの雰囲気が良くないとき		
	前日にやらかしたとき		
怒られたとき	先輩に怒られた次の日	3	4.5%
	たくさん怒られたとき		
睡眠不足	睡眠時間の確保ができていないとき	3	4.5%
	眠たい時		
価値観の差	指導者との価値観の差	2	3.0%
	監督に干されたりしたとき		
その他	帰りが遅く、朝早い時	3	4.5%
	前日がオフの時		
合計		67	

表1 部活に行きたくないと感じた際の記述例とその割合

項目	代表的な記述例	記述数とその割合	
		記述数(個)	割合(%)
我慢	とりあえず体育館に行く	24	31.2%
	無理やり行く		
	叫ぶ、口に出す		
ご褒美	部活後のことを考える	14	18.2%
	オフの日を楽しみにする		
	好きなものを食べてテンションを上げる		
相談	仲間に相談する	8	10.4%
	親に相談する		
	すっきりするまで文句を言う		
趣味	音楽を聴く	6	7.8%
	好きな動画を見る		
	爆音で音楽を聴く		
目標を持つ	チームのことを考えて雰囲気を良くしようとする	5	6.5%
	何のために練習をするのか自分の目的、目標を再確認する		
いい時を振り返る	自分がいいプレーをした時の動画を見る	4	5.2%
	いいプレーができるようにイメトレする		
ストレス発散	ヨガやトレーニングを行い気持ちを落ち着かせる	4	5.2%
	息抜きをする		
勝ちをイメージ	試合で勝つことを考える	2	2.6%
	諦めたら試合の大事な場面で力が出し切れない		
みんなのため	みんなも頑張っているから	2	2.6%
	周りの人も頑張っているし親のために		
睡眠	部活前に寝る	2	2.6%
	たくさん睡眠をとる		
その他	泣いてすっきりする	6	7.8%
	たったの2時間だからと考える		
	いやなことも引退するときにはいい思い出になると考え		
合計		77	

表2 部活に行きたくないと感じた際の対処法の記述例とその割合

の理解も重要となる。まず本を読むなど、知識を深めることが大切であると考えられる。次に、女性選手が生理になったことを伝えられる環境を作ることにも求められる。「健康観察表に整理が始まったとき」、「終わった時」の記入欄を作ることで伝えやすくなると考える。

表2は、部活に行きたくないと感じた際の対処法の記述例とその割合を表したものである。最も記述数が多かったのは我慢で24個(31.2%)であった。代表的な記述例として「とりあえず体育館に行く」や「無理やり行く」がある。2番目はご褒美で14個(18.2%)であった。代表的な記述例として「部活終わりのことを考える」や「オフの日を楽しみにする」がある。3番目は相談で8個(10.4%)であった。代

表的な記述例として「仲間に相談する」や「親に相談する」がある。4番目は趣味で6個(7.8%)であった。代表的な記述例として「音楽を聴く」や「好きな動画を見る」がある。5番目は目標をもつで5個(6.5%)であった。代表的な記述例として「チームのことを考えて雰囲気を良くしようとする」や「何のために練習を行うのか自分の目的、目標を再確認する」がある。

部活動に行きたくないと感じた際の対処方法について調査した結果、「とにかく体育館に行く」や「行けば何とかなる」など我慢して行く人が多く、何をしたらモチベーションが上がるのかという明確な行動を持たない学生が多く存在することが明らかになった。また、ご褒美といった外発的動機付けに依存

する学生も多かった。日本スポーツ振興センター (online) は内発的動機づけを高める重要性を指摘しており、そのための仕組みが必要であると考ええる。

文献

- 1) 遠藤将人 (2017) 大学生バレーボール競技における試合時のモチベーション・精神状態の変化について、卒業研究抄録集：びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部、39-39.
- 2) 平沼憲治 (2022) スポーツパフォーマンスとメンタルヘルス：モチベーション維持、女性心身医学、299-301.
- 3) 中塚仁 (2016) 大学野球部における休養とモチベーションの関係性についての検討、卒業研究抄録集：びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部、96-96.
- 4) 日本スポーツ振興センター (online) 動機づけ (モチベーション).

<https://pathway.jpnsport.go.jp/sports/column11.html>、

(2023年12月20日閲覧).

いじめの「傍観者」および「観衆」 層に見る性格研究 —大学生を対象とした調査を中心に して—

井村 恵美
(指導教員：阪本 美江)

1. はじめに

社会問題にもなっているいじめ。現在もいじめの認知件数やそれによる自殺・不登校件数は増加傾向にある。そして、インターネットが普及したことにより深刻化するいじめに対して、様々な取り組みも行われるようになった。いじめ問題について考える中で、いじめの四構造それぞれに、個人の性格的傾向があるのか否か、と考えた。先行研究によると、加害者、被害者の性格や家族構成などには一定の法則性が見られる、との報告もなされている(杉原：1986)(渡邊：2014)。そこで本研究では、傍観者、観衆にも性格傾向があるのかと考え、調査を行うことでいじめ問題への対策を考察することにした。

2. いじめとは、その現状

2.1 いじめの定義

文部科学省(以下、「文科省」)は、「いじめとは、児童生徒に対して当該児童生徒が在籍している等当該児童生徒と一定の人間関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為(インターネットを通じて行われるものも含む)であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているものとする。なお、行った場所は学校の内外を問わない」(2013)と定義している。この定義は何度か変更されており、追加された部分や削除された

部分もある。それはいじめに対する考え方やいじめのあり方が時代とともに変化した結果ともいえる。

2.2 いじめの現状

小・中・高等学校、特別支援学校におけるいじめの現状が、文科省より公表されている(文部科学省：2021)。

2013年から2022年までの調査結果では、いじめの認知件数が増加傾向にあることが示されている。しかしこれは、単にいじめの件数が増えているというだけではなく、いじめという教育問題に対する理解度が高まり、今まで見過ごされてきた事例も(いじめ)として認知されるようになったからだと考える。

3. いじめが起きるプロセスについて

3.1 いじめの背景

文科省は、いじめの背景は進学をめぐる競争意識などからくる将来への不安、過干渉や過保護などの家庭環境にあるとした。また、インターネットの普及や教師多忙によるコミュニケーション能力の低下も指摘している(文部科学省：2003)。

3.2 いじめの形態の変化

いじめの定義が改定されているように、いじめの形態も変化している。昔のいじめは「ジャイアン型」、今のいじめは「集団リンチ型」と言われている(いじめ総合対策サイト：2010)。

「ジャイアン型」の特徴は突発的で単発的。周囲の人には「いじめる人が悪い、乱暴者」という共通認識があった。「集団リンチ型」の特徴は持続的で、それは学校内外を問わない。周囲の人の意識として、「いじめる側にいた方が安全」と、共感性が薄く、被害者が孤立しやすいという特徴がある。

3.3 いじめの政治性

精神学者である中井久夫氏は、「いじめは政治的

で、人間を奴隷にしてしまうプロセスで行われている」と述べた(中井：2016)。そのプロセスは「孤立化」「無力化」「透明化」の三段階に分けられる。「孤立化」では、対象(被害者)にはいじめられるだけの理由があると周囲に思い込ませることで、孤立化させる。「無力化」は被害者が助けを求めればそれ以上の罰を与え、反抗心をなくす。「透明化」ではいじめが日常化することで周囲の人は特別視しなくなり、被害者は「いじめられない日」を安心するようになり、いじめが見えにくくなる。

4. いじめにおける「傍観者」と「観衆」

4.1 「傍観者」と「観衆」の定義

文科省は、1986年に森田洋司が提唱した「いじめの四構造」に基づき、「傍観者」「観衆」を次のように定義している。「傍観者」は「いじめを見て見ぬふりする者」、「観衆」は「いじめをはやし立てたり、面白がったりしてきている者」である(文部科学省：2003)。

4.2 「傍観者」「観衆」の問題点

「傍観者」の問題点は、いじめを目撃しても自己保身が働き、いじめの拡大・持続に無意識化で加担してしまうということである。また、「傍観者効果」が働き、個々の罪悪感が薄れ、対処が遅れてしまふという点も挙げられる。「傍観者効果」とは、援助行動を起こすことが必要な場面で、自分以外にも「傍観者」がいることにより判断を誤り、援助行動が躊躇されるという集団心理のこと。つまり、いじめを目撃した者が1人である場合と、集団であった場合とでは助ける意識などに差が出てしまうということである。

一方、「観衆」の問題は、周囲の人がいじめを評価する、提案することによりいじめがエスカレートする、という点である。また、エスカレートしてしまう原因として「いじめによる利益」が関係している。「いじめによる利益」とは、家庭内などでのス

トレス発散や、身体的特徴や癖など、他の人とは違うと思われる人(異物者)の排除等である。

5. 「傍観者」「観衆」層にみる性格調査

5.1 調査の概要

以上、いじめの現状を踏まえて、下記の内容で調査を実施することにした。

- ・調査協力者…芦屋大学生 77名
 - ・調査期間・場所…2023年11月中、論者が作成した Google フォームを通じて大学内でアンケートを実施
 - ・質問内容…「いじめの四構造の中で経験した立場(複数回答可)」「傍観者、観衆の経験の有無」「傍観者、観衆を経験した人の自身の性格(13項目)」
- 【倫理的配慮】調査に当たっては、個人が特定されないよう留意した

5.2 調査により明らかになったこと

全体からすると「傍観者」「観衆」は少ない傾向にあったが、その約4割はいじめを認知していたが見て見ぬふりする等、自己保身が働いていたことが明らかとなった。

タイプ別では、「傍観者」は「まじめ、従順、謙虚、親切」など、比較的プラス項目が多い傾向があった。一方「観衆」は、「まじめ」という結果も見られたが、「自己中心的、意志が弱い」などマイナス項目が多い傾向にあることが明らかとなった。以上は、いじめに直接加担しているか否かの差が、結果として表れているのではないかと推察された。

5.3 いじめを防止する上での対策

以上、「傍観者」「観衆」にも一定の性格的傾向がある可能性が示唆された。とくに「傍観者」に見られるような「従順」「謙虚」といった性格傾向も、ときにはいじめのいわゆる「加担者」にもなり得る可能性を考えると、教師は児童生徒の性格的傾向を把握しつつ、対応を行っていく必要がある。また、

教職員はいじめに対する意識をより向上させ、見過ごすことのないような学級運営に努める。いじめを早期発見するためにも、生徒観察や生徒との日常的なコミュニケーションをとることで相談しやすい環境づくりを心掛ける。また、業務に追われいじめに気が付かないこと等を避けるために、効率化や業務内容見直しも必要と考えた。

6. 結論と今後の課題

本研究では、いじめの現状をまずは踏まえて、芦屋大学生を対象にいじめの経験や「傍観者」「観衆」の性格傾向のアンケート調査を行った。その結果、「傍観者」は、「まじめ」、「謙虚」や「親切」等、比較的プラス傾向の特徴が見られることが確認できた。一方、「観衆」は「自己中心的」や「まじめ」、「意志が弱い」等の特徴も見られるということが明らかとなった。以上より、今後いじめ防止には、子どもたちにはそのような性格的傾向があるということを把握しつつ、教師が「いじめは絶対に許さない」という姿勢の下、日常的なコミュニケーションや児童生徒観察に取り組んでいく必要がある、と考えた。

今後の課題としては、本研究が芦屋大学の学生 77 名のみを対象としているため、さらに件数を増やして検証していく必要があると考えている。他大学の学生も調査の対象に加えることで、また異なった結論が見られる可能性もある。引き続き研究を行っていきたい。

【参考文献・引用文献】

- ・杉原一昭・宮田敬・桜井茂男（1986）『『いじめっ子』と『いじめられっ子』の社会的地位とパーソナリティ特性の比較』『筑波大学心理学研究』第 8 号、p63-71.
- ・中井久夫著（2016）『いじめのある世界に生きる君たちへ—いじめられっ子だった精神科医の贈る言葉』中央公論新社.
- ・渡邊杏沙(2016)「大学生のいじめ加害傾向につい

ての考察—性格特性 5 因子と家族機能に着目して—」『東京国際大学院臨床心理学研究科』第 14 号、p95-111.

・その他、いじめ総合対策サイト（2010）、文部科学省、内閣府、法務省統計データ等、参照

いじめの「傍観者」を「仲裁者」へ —「傍観者」にアプローチする KiVaプログラム—

橋本 夢花
(指導教員：武並 朋美)

1. はじめに

「いじめ」は自分には関係ないものだと思っていたが、中学2年生の時にいじめに巻き込まれた。この経験がいじめの問題について考えるきっかけとなり、いじめについていくつかの疑問を持った。相手がいじめられていると感じると、すべての行動が「いじめ」になること、周りの人にいくらやっていると伝えても、信じてもらえないこと。直接のいじめに関わっていない周りの人の方が割合的にも多いからこそ、周りが取るべき行動や巻き込まれないようにするには、どうするべきなのかを学校で教えてほしいということだ。また、被害者側はいじめを受けているため心理的・身体的な面で深い傷を負い、学校に行けなくなるという理由など様々な要因も考えられる。しかし、いじめは、加害者に側に責任があり、自分のしたことに対しての深く反省をするべきなのに、加害者が、いつも通り学校に行けて楽しい生活を送れるのか、納得できないところがあった。このように、日本でのいじめの対応について疑問を持っていたため、ニュースで見た欧米の一部で行われている、いじめた側へのアプローチにとっても共感し、いじめる側、「いじめる人」になる側へのアプローチについて考えたいと思った。

いじめの未然防止や減少にどのような取り組みがあるかを調べる中で興味を持ったのが、いじめにおいて重要な役割を果たしている「傍観者」にアプローチするという、フィンランドのいじめ対策として導入されている「KiVaプログラム」だった。

本研究では、我が国のいじめの現状や問題点を、文献から明らかにするとともに、傍観者に焦点を当てた「KiVaプログラム」について調べる。また、筆者と同じ年代である大学生のいじめの認識、いじめを目撃したことがあるか、その時に取った自分の行動について、傍観者の認識や経験について調べ、そのうえで「KiVaプログラム」が、日本のいじめを未然に防ぎ、減少させることに有効であるか、どのように取り入れ活かすことで、いじめの未然防止やいじめの減少につながるのかを、検討することを目的とする。

2. いじめの現状

文部科学省のいじめに関する調査（令和5年10月4日公表）によると、小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は681,948件であり、前年度に比べ66,597件(10.8%)増加。児童生徒1,000人当たりの認知件数は53.3件(前年度47.7件)。新型コロナウイルス感染症の流行が始まった令和2年度は全国一斉休校など教育活動が制限されたことにより全校種で大幅な減少となったが、令和3年度は新型コロナウイルス感染症流行前の令和元年度並みとなり、令和4年度では再び増加傾向となり過去最多となった。

3. いじめによる心身への影響

いじめが長期化や深刻化になれば、対象となっている子どもは不登校や自殺にまで追い込まれることがある。いじめが原因で登校できず、学ぶことが困難であることは確かであり、心身の成長や将来への影響が出てくる。また、いじめが原因で自殺することもあり、文部科学省はこれらを重大事態として捉えている。いじめを受けた被害者は、不登校や自殺だけでなく精神的に追い詰められ、体調不良や過度のストレス・心身に悪影響を及ぼす可能性があり、いじめ被害の影響には、抑うつや不安、自尊心の低

下、心身症、対人不安などの不適応症状が現われることが明らかにされている。

4. いじめの構造

いじめ問題の研究は多くの研究者によりさまざまに論じられている。近年では、学級全体でいじめを捉えようとする考え方が広まっており、社会学的なモデルとして、もっとも参照にされているのがいじめ研究の第一人者として知られる森田洋司が提唱した「いじめの四層構造論」である。

「いじめの四層構造論」は、直接いじめを行う「加害者」、加害者から直接いじめを受ける「被害者」、自分で直接手を下していないが周りでおもしろがってはやし立てる「観衆」、いじめられている状況を見ても見て見ぬふりをする「傍観者」の4層で構成されている(森田・清水 1986)。いじめの持続や拡大には、いじめる側といじめられる側以外の「観衆」や「傍観者」の立場にいる生徒が大きく影響している。「観衆」はいじめを積極的に是認し、「傍観者」はいじめを暗黙的に支持しいじめを促進する役割を担っている。

5. 傍観者について

5.1 傍観者とは

いじめが行われているのを、見て見ぬふりをしている人、あるいは、やめてほしいと思っても、何をするともできず無力感を抱えている人と考えられている。いじめの場面における「傍観者」は、いじめの加害者や被害者への働きかけを通して、いじめを止めることや被害者への心理的苦痛の低減に重要な役割を果たすことを示唆されている。いじめが深刻化する前に傍観者がいじめている人に対して冷ややかな態度や否定的な反応を示せば、いじめを抑制する存在になり、傍観者の行動の在り方が問題解決のひとつの鍵となる。

5.2 傍観者効果について

傍観者に焦点を当てた取り組みなどが増えてきているが、なぜ傍観者が増えているのかその理由を考えた。その一つの理由として集団心理が働いているのではないかと考える。また、集団心理の一種に「傍観者効果」というものがある。「傍観者効果」とは、ある事象に対して、自分以外に傍観者がいるときに率先して行動を起こさない心理のことである。その傍観者が周りに多いほどその効果は高くなる。この傍観者効果が提唱されるきっかけになったのは1964年にアメリカのニューヨークで起こったキティ・ジェノウィーズ事件である。

実験の結果、都会人か非都会人か人種・年齢などに関わらず、ある事象への参加が増えるほど人は傍観的になるという知見を証明した。

5.3 傍観者効果が起こる原因

1. 責任分散

他者がいることで責任や避難が分散されると考え、行動にできない心理のこと。

2. 評価懸念

他者からの評価を気にしてしまう心理現象のこと。他者からネガティブな評価を受けるのではないかなどの心理が働き行動することが抑制されやすい。

3. 多元無知

自分自身は集団規範を受け入れていないにもかかわらず、ほとんどがその規範を受け入れていると信じている状況のこと。

心理学者のラタネとダーリーによると、傍観者効果を打ち消すには人間の援助行動への意欲をより促進される必要があると考え、援助者に、異常事態が発生していることや緊急性を理解させること、援助者が、適切な援助方法を知っていることのこの2点が対策になる。

6. K i V a プログラムについて

6.1 K i V a プログラムとは

フィンランドでは 1990 年代はじめに、いじめに関する悲惨な事件や自殺が社会問題になった。K i V a プログラムは、現在フィンランドの 90%以上の小中学校で実施されている全国的ないじめ防止プログラムである。K i V a の有効性は科学的に証明されており、学校がいじめに取り組むための具体的なツールや資料を幅広く提供している。このプログラムは世界にも拡大しており、他の学校でも使用され、その成功と効果を証明されている。

6.2 K i V a プログラムの構成

K i V a プログラムは、傍観者をなくすことこそが、いじめの拡大を防ぐと位置付けている。K i V a には、フィンランド語で「楽しい、心地よい」との意味があり、プログラムは義務教育期間の児童生徒を対象としており、月に 1 回 90 分間、年 10 回行うレッスンと合間に行うパソコンのゲームで構成されている。いじめの構造についての講義を受けたり、実際にどんな行動がとれるのかをディスカッションしたりするというものである。いじめの場面を想定し、どう行動すべきかを考える、相手の立場になって考えるなど子どもが主体的かつ試行錯誤的にいじめへの対応の仕方を学ぶ。またいじめられている子に声を掛けることや味方になることの大切さを、これらを通して学習する。

6.3 K i V a による効果

K i V a プログラムの効果の検証結果は、4 本の論文により報告されていた (Table1)。これらは、117 校の介入学校 (K i V a 実施学校) と 117 校の対照校 (K i V a 非実施学校) で RCT により効果を検証したものである。フィンランド国内で 2007~2008 年に実施された。小学 4~6 年生までの結果によると、K i V a 実施学校では、言葉によるいじめ、身体的ないじめ、ネットいじめを含むいじめ被害も減少し

(Salmivallietal. 2011)、いじめに関与した子どもからの報告でも、関与していない子どもからの報告でも、いじめが統計学的に有意に減少した (Kärnäetal. 2011)。また、プログラム導入後は、いじめの減少だけでなく不安・抑うつ の低下、対人関係の改善などにも効果を上げている (Williford et al. 2012)。

7. 研究方法

現在の大学生・短大生を対象に、Google フォームでアンケートを実施した。いじめを今までに目撃したことがあるか、その時にとった行動。いじめに対する考え方や捉え方、傍観者にたいする意見、そのように考える理由を自由記述してもらい、その結果から考察をしていく。回答人数は 64 人である。

8. アンケート結果と考察

いじめを見て見ぬふりをするのはいじめに関わっていると捉えている人が多いことが分かった。一般的には、傍観者というと、いじめに立ち向かわない、何もしないと非難されることが多いが、傍観者の立場であっても、心の中で自分の思いと葛藤している人もいるということが分かった。

実際にいじめの現場を目撃し、傍観者になってしまった場合、いじめを見ても何とも思わず笑っている者・関係ないと思う者もいるかもしれないが、一方で、いじめを自ら止めに入ることで、「自分が次のターゲットになるかもしれない」「どうしたらいいのかわからない」等の理由で周囲の雰囲気と同調して傍観することしかできず、いじめを止めることのできなかつた自分自身を強く責めて、その思いに耐え続けている人がいることも事実であった。

これらのことから、「観衆」「傍観者」と言った直接いじめを行っていない人たちは、何もしたくないわけではなく、何かしたい、何かした方がいいと思っはいるが、具体的な行動や方法が不明瞭で

あると感じる。また、「自分がいじめられたら」という怖さや不安を感じており、自己保身を図るなどの葛藤に直面していることが推察される。このような結果から、加害者になることを止める対策も必要だが、「傍観者」や「観衆」と言った、何かしたいと思っている、どうしたらよいかわからない多くの人たちに、アプローチすることがいじめの防止として必要ではないかと考える。

9. 総合考察

本研究では、いじめにおいて重要な役割を果たしている「傍観者」が増えている傾向にあると考えられ、「傍観者」にアプローチするというフィンランドのいじめ対策として導入されているKiVaプログラムが、日本のいじめを未然に防ぎ、減少させることに有効であるか、どのように取り入れ活かすことで、いじめの未然防止や、いじめの減少につながるのかを検討した。

いじめにおいては、森田らの研究からも「観衆」「傍観者」の立場にいる生徒は、いじめを是正し、いじめを暗黙的に支持し促進する役割を持つ等、傍観者がいじめに重要な役割を果たしているということが明らかになった。

なぜ傍観者に焦点を当てるのが、いじめ対策するのに有効であるか、筆者の考える理由を4つ挙げる。1つ目は、いじめを受けている被害者も辛い、いじめを知っている周りの人が無関心で何もしてくれないという感情を持ち、「自分は一人なんだ」という孤独が、より傷つき辛い。実際に加担していなくても被害者にとっては、ただ傍観している行為はいじめられているのと同じであるという意識を「傍観者」が感じることができる。2つ目は、アンケートからも明らかになったように、いじめを中心で行なっている人よりも、傍観している人の方が圧倒的に多く、いじめはよくない、助けたいと考える人が多い。「傍観者」は何かしたい、何かした方がいいと思っているが、「自分がいじめられたら」と怖さや不安

からの自己保身と葛藤している。傍観者にアプローチを行うことで、いじめとの捉え方を変えることができ、傍観者から仲裁者へと行動変容できる人が増えると考える。「仲裁者」が増加するほど、集団心理を良い方向に活用することができ、加害者の権力を抑えることにとっても有効であり、いじめが深刻化することを事前に防止することにも効果的だと考える。3つ目は、傍観者の中には、具体的な行動や方法がわからないため、何もできない人も多い。KiVaプログラムでは、コンピューターシミュレーションゲーム等を使い、実際にいじめの場面を想定し、どんな行動がとれるのかをディスカッションしたり、どう行動すべきかを考えることができる。子どもが主体的かつ試行錯誤的に、いじめへの対応の仕方を学べるのだ。これらを日頃から楽しく学ぶことによって、当たり前前に相手の思いを想定し、いじめられている子に声を掛け、味方になることの大切さが分かる。見て見ぬふり、どうすればいいかわからないということが無くなり、いじめ防止に重要な役割を果たすと考えられる。4つ目は、KiVaプログラムは、いじめの減少だけでなく不安・抑うつ低下、対人関係の改善などにも効果を上げている。カウンセラーなどの設置など個々に対応するのではなく、学校全体の雰囲気を整備し、被害者がいじめのことを話せる校風を整えることで、いじめに早く気づき、いじめの報告をしやすくなるなど、いじめの早期対応・深刻化を防ぐことに効果を上げられると考えられる。

現在の日本のいじめ防止対策の実施は、以前よりも充実し認知件数や対応件数は増加していると考えられるが、いじめの根本的解決につながっているのか疑問である。いじめの傍観者効果は、悪い方向に向くことが多いため、傍観者の行動のあり方が、いじめ防止に大切である。自分の意見・意思を持つこと、周りに流されないことが必要だと考える。

その力を育て養っていくためにも、傍観者に視点を当てたKiVaプログラムを取り入れ、大人から「どのような行動をとるべきか」と言葉で教えや

せるのではなく、子どもたちが、自ら気づき考え、子ども同士で思いを伝え合うことが大切である。そうすることで、子どもたちが物事を広く多面的・多角的に捉えることができるようになると思う。一方的に教えるのではなく、学校全体の雰囲気を整備し、被害者がいじめのことを話せる校風を整える環境をつくること、いじめが無くならないにしても、今のいじめの現状を変えることに効果的だと考える。日本のいじめ防止対策として、日本の文化にあった日本版の「KiVaプログラム」の導入が望まれる。

<引用文献>

- ・星田昌紀 (2015) . ビジネス読書会における傍観者効果についての研究
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jasmin/2015f/0/2015f_359/_pdf/-char/ja
(2023年10月20日)
- ・北川裕子・小塩靖崇・股村美里・佐々木司・東郷史治 (2013) . 学校におけるいじめ対策教育 — フィンランドのKiVaに注目して —、不安障害研究、5(1)、31-38. 草の実堂
<<https://kusanomido.com/life/jiken/60465/>>
(2023年11月24日)
- ・文部科学省 いじめの定義の変遷 (mext. go. jp)
(2023年11月23日)
- ・文部科学省 いじめ防止対策推進法 (概要) (mext. go. jp) (2023年11月23日)
- ・文部科学省 (2022) いじめの状況及び文部科学省の取り組みについて
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodomo_ijime_boushi_kaigi/dail/siryoku2-1.pdf> (2023年11月10日)
- ・森田洋司、清水賢二(1986)「いじめ—教室の病—」金子書房 (1994)
- ・中井久夫 (2016) . いじめのある世界に生きる君たちへ—いじめられっ子だった精神科医の贈る言葉 中央公論新社
- ・仁平義明 (2017) . 傍観者に焦点をあてた “いじめ対応” プログラムの効果量に関する研究と実践の現状、星槎大学紀要、3、53-66.
- ・白木優馬 いじめ場面における傍観者の援助行動を生起させるには計画的行動理論 および傍観者の自己認知からの検討<https://tasukui-garashi.com/lab/wp-content/uploads/2013/08/Shiraki_FR2013-2.pdf> (2023年11月20日)
- ・滝本ゼミ政策分析パート傍観者にアプローチするKiVaプログラムでいじめを減らす<<https://tsemi190194895.wordpress.com/>> (2023年10月)

3. 2023 年度卒業論文タイトル一覧

教育学科

杉島 威一郎 ゼミ

日韓アイドルの比較研究

青木 敦英 ゼミ

大学女子バレーボール選手に対する Velocity Based Training の効果
--

芦屋大学女子バレーボール選手の体力の特徴

芦屋大学女子バレーボール部の勝率を高めるための一考察：過去4年間のJVIMSデータの分析から
--

フィギュアスケート選手の心理的競技能力について

高校生バスケットボール選手の身体特性および敏捷性の縦断的变化

バスケットボールにおけるスタッツおよびアドバンススタッツが勝敗に及ぼす影響：芦屋大学男子バスケットボール部を対象として

大学サッカー選手の心理的競技能力について

バスケットボールにおける異なる競技レベルのフリースロー成功率の比較

阪本 美江 ゼミ

いじめの「傍観者」および「観衆」層に見る性格研究 —大学生を対象とした調査を中心にして—
--

日中における「いじめ」の諸相 —両国間における現状と今後の課題に着目して—

いじめの事例検討とその対策について —大阪府に着目して—

サッカー選手の実績と経歴についての検討 —ワールドカップ出場選手に着目して—
--

いじめ被害の長期的な影響についての一考察

いじめの防止対策についての一考察 —行政上の課題を中心に—

柔道競技における眼窩底骨折の一事例 —発症から治癒までの経過にも着目して—

集団主義文化における「いじめ」問題と対応の考察

三浦 正樹 ゼミ

血液型の特徴・性格傾向と人間係性について
摂食障害と人間関係について
日本人のMBTI比率順における興味関心度に関する調査
早生まれの心理
あがり心身に及ぼす影響と対策方法 主に剣道について
野球選手のイップスの特徴
自閉スペクトラム症 (ASD) の理解を深めるために
栗山ノートに学ぶ
前人未到の二刀流日本人No. 1 プロ野球選手のこれまでの歩み
マーフィ
音楽とスポーツの関係性と音楽がスポーツに与える影響
推し活における購買活動と性格の関係
コロナと心理学
言葉の力 一人を回復させる言葉

金 相煥 ゼミ

進学におけるチーム選択に関する一考察
生き方についての一考察：要領よく生きる重要性について
エゴイストについて：サッカーと映画を含んで
サッカーと生活習慣の関連性について：コンディショニングにおけるパフォーマンスへの影響
日本とドイツ・スペインの育成環境についての一考察
「早生まれ」による成長段階の影響についての一考察
サッカーでの怪我における一考察：医療スタッフの重要性について自分の経験を含んで
コミュニケーションの必要性について：芦屋大学4年生スポーツ学生を対象として
サッカーと筋力トレーニングの関係性における一考察
素走りの重要性についての一考察：サッカー競技において

竹安 知枝 ゼミ

ストレスが心身に与える影響
バスケットボール選手における負傷部位に関する研究：大学生を対象として
テーマパークの魅力と今後の発展に向けた課題について
バスケットボール選手の生活習慣と怪我の部位について：高校生と大学生を対象として
日本におけるサッカーの課題と普及に関する研究：サッカーのルールに着目して
フットサルの普及に向けた課題について：ルールに着目して
注意力や敏捷性を活性化するための方法に関する研究：瞑想や音楽・動画の視聴による介入を通して
卓球の指導法に関する研究：指導者の視点から
映像作品の現状と今後の可能性について：人々に支持される作品とは
パラスポーツの発展に向けて：アスリートの発掘と育成を目指して

西光 哲治 ゼミ

空手は武道かスポーツか
空手の組手における気合の声と攻撃の突きの関係性
障害者柔道の特性と継続要因について
柔道の人口を増やすには
ボクシングの安全性と危険性
柔道における体罰問題について
柔道におけるルールの変動による一考察
相撲の立ち合いにおける強さや大切さについて
空手の組手における気合の声と攻撃の突きの関係性

石川 峻 ゼミ

バレーボールにおけるサーブレシーブ返球率と試合勝敗率の関係性：女子大学生を対象として
高校女子バレーボール選手の進路選択の決定因子
スポーツ選手のモチベーションが下がったときの対処方法
プロサッカー選手の学歴と出場時間
全国高校サッカー選手権大会に出場する選手に相対的年齢効果はあるのか？
バスケットボールにおけるフリースローに関する研究：Home court アプリを使用して
バスケットボールにおけるフローター・シュートに関する研究：HomeCourt アプリを使用して
上半身のプライオメトリクストレーニングについて

伊藤 武徳 ゼミ

剣道指導の制約における競技影響について
競技場面における応援の効果について～芦屋大学剣道部の取り組みをもとの一考察～
伝統派空手スポーツ化による課題と展望
ボクシングの減量について～課題解決のための一考察～
環境がもたらすクラブ活動の在り方～自身のケーススタディからの考察～
剣道の歴史について～グローバル上の課題からの一考察～
剣道の競技場面における相手との『やりとり』の段階的指導について～私自身の剣道経験からみる考察～
試合前におけるモチベーションの上げ方
中国と日本の高齢化対策の比較研究
中国と日本の舞踊の発展における比較研究
柔道競技の事故予防における一考察

吉村 節子 ゼミ

ダンス映像制作作品「inspire」について～自分自身の 築き/気づき のために～
ダンス映像制作作品「Divers」について～他者の協力の元に成り立つ作品制作を経験して～
学園祭ダンス部ステージ発表における一考察～製作と制作の間で～
ダンス映像制作作品「声をあげる」について～「The Greatest Showman」 「VOICE」 の楽曲から導かれたオムニバスの作品群～
ダンス映像制作作品「四季」について～自己表現力への手がかりとして～

児童教育学科

毛利 康人 ゼミ

格闘技の魅力
阪神タイガースの優勝と日本一ができた要因について

石田 愛子 ゼミ

保育者の労働環境に関する一考察 (卒業演奏：「ザナルカンドにて」ピアノ独奏)
テレビドラマから考察する恋愛観・結婚観の変遷 (卒業演奏：「Flavor Of Life」「真っ白」ピアノ独奏)
明石市の今後の子育て支援施策に必要なこととは (卒業演奏：「M」ピアノ独奏)
自身のトランペット練習の確立：木田式トランペットメソッド (卒業演奏：アルチュニアン作曲「トランペット協奏曲」独奏)
仮面ライダーが愛され続ける理由とは (卒業演奏：「Double-Action Piano form 2」ピアノ独奏)

渡 康彦 ゼミ

食育の一環としてのトマト栽培について 土壌栽培と水耕栽培の比較
スーパー戦隊についての研究
昆虫食
ゲームと教育
ダートグレード競走の魅力について
ONE PIECE について
K-POP がなぜ今の日本で人気なのか
中国の教育と日本の教育の違い

大谷 彰子 ゼミ

子どもに影響を与えるキッズコスメ
「LGBTQ+」の理解と認知度
「主体的・対話的で深い学び」を幼児期から児童期へ：保幼小接続について
幼児の育ちにとって有効な動画視聴とは
幼児が懂れる要因について

丹下 秀夫 ゼミ

人類の言語の歴史から見る日本語と英語の歴史

中村 整七 ゼミ

「主体的・対話的で深い学び」

学校給食について

SNS が児童に与える影響（情報モラル教育）

金融教育について

児童が進んで受ける授業について

福山 恵美子 ゼミ

異年齢保育によって育まれるもの

ヒップホップの魅力

発達障害から考えるインクルーシブ教育

外国人労働者が抱える困難さについて

安藝 雅美 ゼミ

子どもの運動離れについての一考察：実習と観察を通して

子どもの偏食との向き合い方

造形遊びから促される子どもの成長について

オールアウトの実現：心理的限界と生理的限界

武並 朋美 ゼミ

地域における子育て支援：～宝塚市の子育て支援～

いじめの「傍観者」を「仲裁者」へー「傍観者」にアプローチするK i V a プログラムー
--

ユニバーサルスタジオジャパンが私の行動心理に影響を及ぼした要因を探る

4. 教員免許状・保育士資格 取得者、採用状況

臨床教育学部 教員免許状・保育士資格一括申請授与件数（過去3力年）

		2021	2022	2023	合計
教育学科	保健体育（高等学校）	17	16	25	58
	保健体育（中学校）	16	16	24	56
	公民	1	2	4	7
	社会	0	1	5	6
児童教育学科	小学校	11	10	16	37
	幼稚園	7	13	15	35
	保育士		8	10	18
	特別支援学校	8	2	13	23
合計		60	68	112	240

2023 年度 臨床教育学部 教員採用試験合格者数

		現役生	過年度生	合計
教育学科	保健体育（高等学校）	0	0	0
	保健体育（中学校）	0	0	0
	公民	0	0	0
	社会	0	0	0
児童教育学科	小学校	8	0	8
	幼稚園	0	0	0
	保育所	1	0	1
	特別支援学校	2	0	2
合計		11	0	11

臨床教育学部 教職等就職状況（過去3カ年）

卒業 年度	正規採用							常勤講師							合計
	高等学校	中学校	小学校	幼稚園	認定こども園	保育所	特別支援学校	高等学校	中学校	小学校	幼稚園	認定こども園	保育所	特別支援学校	
2021	0	0	2	3			0	0	0	2	0			1	8
2022	1	7	5	3	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	20
2023	2	1	4	0	2	5	2	0	4	2	0	1	1	2	26
合計	3	8	11	6	2	8	2	0	5	4	0	1	1	3	54

『芦屋大学臨床教育学部 教育ジャーナル』編集方針

1. 発行目的

本学臨床教育学部における教育・研究活動に資するため、『芦屋大学臨床教育学部 教育ジャーナル』を発行する。

2. 構成内容

- (1) 論文：著者自身の原著で、オリジナリティがあり、一定の結論を提示して研究論文の内容、形式を整えているもの
- (2) 実践研究：授業実践、教材・教具の開発等、教職教育に関わるもの
- (3) 報告記録：学生、卒業生による報告・記録
- (4) 優秀卒業論文抄録
- (5) 卒業論文タイトル一覧
- (6) 教員採用試験結果及び教職課程履修者数、免許取得件数
- (7) その他(学部学科の活動報告、研修会等の参加報告、資料紹介、書評等)

3. 発行

年度末(毎年 3 月中旬～下旬)に発行する。

4. 投稿資格者

- (1) 本学臨床教育学部の教員(専任、特任、非常勤)
- (2) 教職課程に関わる教職員
- (3) 教職課程教育実習校等の関係者
- (4) 本学臨床教育学部の学生(科目等履修生を含む)
- (5) 本学臨床教育学部の卒業生
- (6) 臨床教育学部長が特に認めた者

5. 執筆

- (1) 原稿は執筆者本人による責任とする。
- (2) 原稿提出の締め切り日については編集委員会で決定する。
- (3) 投稿原稿は、原則として未発表のものとする。
- (4) 原稿の作成は、『芦屋大学論叢 執筆要領』に準ずる。ただし、様式は様式B (横書き 2 段組、23 字 x 2 段 x 38 行) とする。
- (5) 提出は、完全原稿とする。

6. 著作権と電子データの公開

- (1) 掲載が決定した論文等の著作権は、原則として『芦屋大学臨床教育学部 教育ジャーナル』編集委員会に

属する。ただし、執筆内容が第三者の著作権を侵害するなどの指摘がなされ、第三者に損害を与えた場合、著者がその責任を負う。

- (2) 『芦屋大学臨床教育学部 教育ジャーナル』は電子データ化し、Web上に掲載し公開する。詳細は編集委員会において協議する。

7. 編集

- (1) 編集作業に当たり編集委員会を設置する。
- (2) 編集委員は臨床教育学部長、教育学科主任、児童教育学科主任、臨床教育学部長が推薦する臨床教育学部専任教員（若干名）とする。
- (3) 臨床教育学部長が推薦する臨床教育学部専任教員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。
- (4) 受領原稿の掲載可否は編集委員会が判断する。

8. その他

必要に応じて編集委員会にて検討する。

執筆者紹介

中西 千春 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 3年生
佐藤 愛海 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 3年生
廣田 結菜 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 3年生
金木 夏輝 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
高橋 はな 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
山本 愛代 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 3年生
中村 有理花 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 3年生
川内 梨央 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
三浦 蓮一郎 芦屋大学 臨床教育学部 教育学科 4年生
北井 万由実 芦屋大学 臨床教育学部 教育学科 4年生
近藤 征哉 芦屋大学 臨床教育学部 教育学科 4年生
荒川 奏 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 2年生
池田 美咲 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
荒川 季奈 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
橋本 愛花 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
福岡 歩美 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生
山口 明莉 芦屋大学 臨床教育学部 教育学科 4年生
井村 恵美 芦屋大学 臨床教育学部 教育学科 4年生
橋本 夢花 芦屋大学 臨床教育学部 児童教育学科 4年生

令和6年3月19日 印刷

令和6年3月25日 発行

芦屋大学臨床教育学部
教育ジャーナル
4号

編集 『芦屋大学臨床教育学部 教育ジャーナル』編集委員会

発行人 芦屋大学臨床教育学部

発行所 芦屋大学

〒659-8511 芦屋市六麓荘町13-22

TEL (0797) 23-0661 (代)

FAX (0797) 23-1901

印刷所 中村企画印刷社

神戸市灘区篠原北町2丁目6-12
